

林業で過疎に挑戦

大分県上津江村村長 井上 伸史

上津江村は大分県西北部の山村で、面積88km²の約95%を山林原野で占めています。杉の人工林を核とした日田林業地帯の一翼を担っています。人口は昭和34年をピーク(3,333人)に減りつづけ、現在は約1,500人で大分県下では一番のミニ自治体であります。

昭和56年春、34歳で村長に就任しましたが、林業以外にさしたる産業もなく、人工流出に頭を痛めていました。村の死活問題となってしまった過疎対策に何か名案はないものかと考え続けて浮かんだのが「都会へのアピール」でした。この発想から生まれたのが「家一棟分ふるさとの森づくり」でした。

地域の発展は人と人との往来から始まると言われています。上津江村と都会を結ぶ人と人との交流を基本理念として、この「家一棟分ふるさとの森づくり」を始めた訳です。「杉の香りあるマイホームづくりを、それも自分で投資した山林から…」というキャッチフレーズで全国に呼びかけ、村有林内の20年生30年生の杉を媒体として、1口60万円で山林地主になってもらい、20年後、家一棟分(100m²=30坪)に必要な木材30m³(製材品であれば24m³)を差しあげるといふものです。また希望者にはお金でもよく、選択は投資した人の自由になっています。ただし、製材費、運搬費等については実費をいただくとし、20年間の維持管理は村が責任をもって行っています。

この事業についての皆様の理解を深めてもらうため、福岡、東京、現地の3カ所で説明会を開きました。都市部のホテルを借りての説明会ですので、村のPRを含め説明しました。どの会場でも活発な質問が出てなかなか良い雰囲気でした。都会の人のふるさとの対する愛着心、自然とのふれあい等を強く感じた次第です。また村内においても反響はさまざまであり、賛成ばかりの意見ではありませんでした。「成長途中の杉林をなぜ売するのか」「村のメリットは何があるのか」等々の意見もありましたが、説明を繰り返していくうちに概ね村民の理解を得ることができました。募集口数100口に対し、第一次、第二次の申込者は850人となり、公開抽選により会員の決定をしました。

この事業は都市と山村を結ぶ人と人とのふれ合い、

都会人の持つセンス、考え方の吸収にもつながり、また都会人の森林・林業に対する理解、自然に親しんでほしいという願い、村民との融和、山村への投資によって山を持つ喜び、自分の育てた杉材で家を建て住むという願い等々、様々な想いを含んでいます。この事業を小さな過疎村の発展にどう結びつけていくかが今後の課題です。

次に「除間伐材利用によるハウスづくりについて」ですが、上津江村受託研究(間伐材利用のデザイン研究)における間伐丸太の建築系、家具系、遊具系への応用デザインに関する基礎的研究の一部について紹介します。

1983年の上津江村総合計画報告書(上記受託研究の一部)によれば、上津江村の現状を分析し「過疎を防ぎ、働く場、生活の場」として村をとらえることが基本的構想であるとうたわれています。構想の達成は林野の95%を占める針葉樹林(その大部分がスギ人工林)の経済振興に果たす役割を強化することによって成就しなければならないとあります。本村の優れた森林資源も素材の適正な流通経済の確立とともに生きてくるものであります。この点について報告書は次のように分析しています。

素材の市場価格が低迷している時は「素材生産の抑制が働き、蓄積が増え、森林保護、森林防災という面からも限界になる。」と問題点を述べ、その結果「山林作業従事者の就労が不安定になり、過疎化現象が必然的に起こり、安定した山林作業従事者の確保が難しくなり、木材の生産コスト高という悪循環を繰り返すことになる。」とその因果関係を指摘しています。この問題を改善すべく活路のひとつとして、間伐材の経済的価値向上が人工林を育成する山村で提唱されています。間伐材利用の内容的展開が本報告のテーマであるデザインの目的であります。ここでいうデザインとは物を作るときの形の決定のみを言うのではなく、なぜその物が必要なのか、それがあっていくことによって、どのように現状を改革できるか、さらに社会に対し、理想とするものをどのように選択しようかとするのか、

その考え方の過程から検討し発展する大きな幅をもつ概念であります。

この一環として、除間伐材の高度利用に日田産業工芸試験所の指導援助をうけながら杉の丸太ハウスづくりに乗りだしました。丸型加工材の校倉造りのシステムが日田のロッキーハウスという形で、軽井沢や東京の晴海ショウにも出展、大変な好評を得ました。そこでこのハウスを実証するため、村内の公共施設（林業後継者活動拠点施設、生活改善センター等）への導入を図りました。冬暖かく、夏涼しいこの建物は利用していただいた村民にも好評であり、意を強くしている

ところです。今後は村外へシェアを開拓して販路を拡大していくよう推進中であります。

ロッキーハウス用丸太の加工も新林構実験事業の一環として加工施設を設置し、村営で提供しているところです。加工時にでてくるノコクズについても、きのこ栽培用、牛舎等の敷わらがわり等に有効利用し付加価値を高め、除間伐の推進に努めているところです。

これらわずかな例ですが、自村で生産する間伐材を自村民のための生活環境整備に率先して利用していくことが、今後とも是非とも必要なことでもあります。